集団場面での紙芝居の読み聞かせにおける幼児の視聴態度に関する研究
―視聴座席形態・年齢要因・視聴時間からの検討―

森光　彩*・藤原　正光**

On Preschool Picture-story Shows and Children's Attitudes towards Them: An Analysis Based on Seating Arrangements, Age Groups and Learning Hours

Aya MORIMITSU, Masamitsu FUJIHARA

要旨　紙芝居の視聴の際，幼児の視聴態度が，視聴座席形態や年齢要因や視聴時間の要因にどのように影響されるかを検討した．被験者は，3歳から6歳の幼稚園児38名であり，年少児クラスと年長児クラスそれぞれ1クラスを研究対象とした．視聴座席形態は，教師に対して，垂直・対面・自由視聴座席の3形態であった．分析の対象とした視聴時間は，前半2分・後半2分であった．視聴態度は当該時間中の園児の反応であり，小林（1997）の分類基準に基づきポジティブ態度とネガティブ態度に分け，平均出現頻度を従属変数とした．結果は次の通りである．①実験を通して，ポジティブな態度がほとんどであった．②垂直視聴座席形態は，年長児のポジティブ態度形成に有効に機能している．③自由視聴座席形態は，ネガティブな態度を生じ易く，特に年少児に顕著である．④ポジティブ態度は，視聴時間の前半により多くみられ，⑤ネガティブ態度は，垂直視聴座席形態では後半に多くみられが，対面・自由視聴座席形態では，逆に後半に低くなる傾向が示された．

キーワード：幼稚園児　紙芝居の読み聞かせ　視聴座席形態　ポジティブな視聴態度　ネガティブな視聴態度

問題と目的

大学の授業や講演の際，学生や受講者の態度や行動と着席している座席との関係は，一般的に，教師や講演者に近い位置にある者ほど熱心に受講し成績も良好であるといわれている．

出口拓彦（2007）は，大学の授業における私語と座席位置の関連について，座席位置が教室後方の学生ほど“授業と無関係な私語”の頻度や被私語頻度（話しかけられる）が高いと報告している．また，下鶴幸宏・中野正博（2008）は，質問紙調査の結果，座席が前方の学生の方ほど学習意欲が高く，私語も授業と関係したものであり，講義に高い関心を持っている．後方の座席の学生は，講義には上の空であり，講義時間を退屈であると感じ，眠気に襲われ講義と無関係な私語をするなど，講義に後ろ向きな態度や行動がより多くみられると報告している．

Millard, R. J. & Stimson, D. V.（1980）は，座席選択行動が成績と関連する可能性は低いが，教室における興味や関心に反映されるとし，前方に着席している学生の方が，授業に対する興味や関心が高く，授業参加意識や学習動機も優れていることを明らかにしている．

集団行動を学びはじめる保育所や幼稚園の園児の着席位置と視聴態度や行動との関係はどうであろうか．小林真（1997）は，3歳～5歳の幼稚園児90名を対象に，絵本の読み聞かせと座席位置との関係について興味深い研究を行っている．この研究の視聴座席形態は，園児の座る位置は自由であり，椅子は用いずに床にじかに座る“自由視

*もりみつ　あや　私立・浜島幼稚園（東京都）
**ふじはら　まさみつ　文教大学教育学部心理教育課程

聴座席形態”であった．主な結果は次の通りである．①3歳児では，後方の列に座っていた園児は，明らかに絵本に興味を示している時間は少なく，絵本の視聴とは無関係な行動を示していた．②4歳児では，後方に座っている園児は，集中時間は短いが徐々に集中しようとする姿勢がみられた．③5歳児では，座っている位置と関係なく読み聞かせの間中ずっと絵本に興味を示していた．

教室の机や椅子の配置は，教卓に対して垂直（縦）の行列型，対面（横）の行列型，グループ学習型（人数分机や椅子を集める），リーダーを中心としたコの字型などがある．机や椅子の配置の型は，教科や科目（大学の場合）の授業内容や授業形態（講義形式，演習形式等）により異なって選択されているが，小学校から大学の教室の机と椅子の配置は，教卓に対して縦・横の行列型かグループ学習形態が一般的である．保育所や幼稚園で絵本や紙芝居の読み聞かせの時間では，読み手（教師）の周りに自由に座る視聴形態が比較的多く取り入れられている．しかし，教室内の決められた机や椅子に着席する縦・横の行列型の視聴形態も一般的である．

これまで視聴座席形態と園児の視聴態度や行動変化に関する研究は，あまり見当たらない．

着席して授業を受ける学校での望ましい（ポジティブな）受講態度として，静かに傾聴する，熱心にノートを取る，理解できない個所を教師に質問する，指定された課題について友だちと話し合う，等をあげることができる．望ましくない（ネガティブな）受講態度には，私語をする，当該の授業と無関係な活動（いわゆる内職，マンガを描く等）をする，居眠りをする，授業妨害行動（授業と無関係な教師への質問，立ち歩き，奇声を発する，授業中の喧嘩など），等が考えられる．

小林（1997）は，幼稚園での絵本の読み聞かせにおける子どもの行動を，次のような反応分類カテゴリーから分類している．〈興味を示した行動〉：①視線が本に向いている/本に集中している．②その場に興味を示し，発言する．③本の近くまで寄って行って指をさす．④笑い声をあげる．⑤他の友だちと面白かったことを言い合う．⑥絵本の場面を真似する．⑦集中しているが，体が動いている．⑧前に乗り出す．⑨微笑する．⑩驚く．〈興味を示さなかった行動〉：①手足をモジモジさせて落ち着かない．②横の友だちと話（関係のない）をする．③視線は本に向いているが，内容は追っていない．④ボーとしている/あくびをしている．⑤まったく違う方を向いている．

物語や絵本への興味や関心の度合いと年齢との関係は，年齢とともに物語の理解力や集中時間が増加しイメージや空想が広がることから，ポジティブな視聴態度や集中して視聴できる時間も園児の年齢とともに高まることが予想される．

本研究の主な目的は，幼稚園児を対象に，“紙芝居”の視聴態度に及ぼす効果を視聴座席形態要因（垂直･対面･自由），年齢要因（年少･年長），視聴時間要因（前半・後半）から検討することにある．

視聴座席形態は，実験者に向かって垂直（縦）の座席配列に着席する型（垂直視聴座席形態），対面（横）の座席配列に着席する型（対面視聴座席形態），読み手の周りに自由に着席して視聴する型（自由視聴座席形態）の3形態である（図1　参照）．

年齢要因は，年少児（3歳児クラス：3～4歳）と年長児（5歳児クラス：5～6歳）の2クラスの園児である．

視聴時間要因は，紙芝居の前半（2分）と後半（2分）を分析の対象とした．

視聴態度は，ポジティブな態度とネガティブな態度に分類し，本研究の従属変数とした．態度の分類基準は，小林(1997)の“絵本の読み聞かせ”実験で用いた「子どもの反応の分類カテゴリー」をそのまま使用した．

方　法

被験者　埼玉県k市の一般的な私立幼稚園の園児

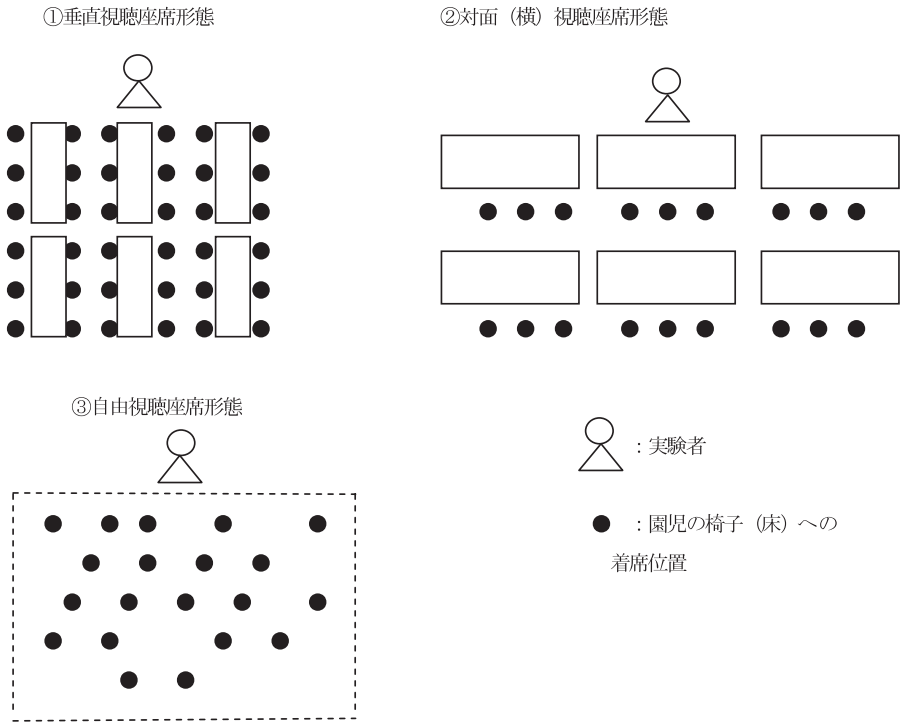

図1　園児の紙芝居視聴座席形態（垂直・対面・自由）

38名であった．内訳は，年少児（3～4歳児14名），年長児（5～6歳児24名）それぞれ1クラスであった．年少児は4～5名の3グループ，年長児は8名の3グループに分かれ，実験の均等性を保つために予め決められた3つの視聴座席形態（垂直・対面・自由）の順序で，形態ごと異なる3種類の“紙芝居の読み聞かせ”の実験に参加した．

手続き　登園後の“自由遊び”の時間を利用し，幼稚園の空き教室を利用して行われた．実験導入前に園児をリラックスさせるために“手遊び”を行い，“紙芝居の読み聞かせ”実験へのスムーズな移行を図った．

紙芝居の内容は，3つの視聴形態でそれぞれ異なる内容であった．井上よう子（作）・岡村好文（画）（2001）「ウミウシめいたんてい」，浅沼とおる（作/画）（2001）「イソギンチャクとウソギンチャク」，宮本えつよし（作/画）（2001）「さびしんぼうのヒトデくん」の3作品を用いた．いずれの作品も3～5歳児に理解可能であることが，事前に当該幼稚園の担任教諭によって確かめられ．それぞれ5分以内で終了可能な作品であった．

行動分析方法　園児一人ひとりの行動分析をより正確に行うために，ゼッケン番号の付いているビブスを着用させ，実験終了後VTRによる分析を行った．分析時間は紙芝居の開始後，2分間を前半，終了前の2分間を後半とした．園児の行動は15秒ごとチェックされ，時系列的な行動の変化が測定された．したがって，行動分析の対象とされた時間は，前半（15秒×8＝120秒），後半（15秒×8＝120秒）であった．

行動分析の基準　小林（1997）の「子どもの反応の分類カテゴリー」示す項目の中で，絵本や本と表記されている個所を“紙芝居”に変え，残りの個所はそのまま用いた．また，興味を示した行動を“ポジティブな態度”（10項目），興味を示さなかった行動を“ネガティブ態度”（5項目）表記した（表1　参照）．園児の行動の分類は，行動分析基準に基づき第1執筆者（森光）自身により行われた．

実験の実施期間　2009年11月25日～11月27日であった．

表1　紙芝居の視聴態度（ポジティブ視聴態度・ネガティブ視聴態度）

視聴態度のカテゴリー項目	平均頻度	標準偏差	人　数
〈ポジティブ視聴態度〉			
1. 視線が紙芝居に向いている/紙芝居に集中している	15.21	4.11	38
2. その場面に興味を示し，発言する	0.42	0.87	38
3. 紙芝居の近くまで寄って行って指をさす	0.00	0.00	38
4. 笑い声をあげる	0.06	0.28	38
5. 他の友だちと紙芝居の話をする	0.07	0.18	38
6. 紙芝居の場面を真似する	0.00	0.00	38
7. 集中しているが，身体が動いている	6.41	2.54	38
8. 前に乗り出す	0.14	0.49	38
9. 微笑する	0.29	0.39	38
10. 驚く	0.02	0.08	38
〈ネガティブ視聴態度〉			
1. 手足をモジモジさせて，落ち着きがない	1.90	1.80	38
2. 横の友だちと（関係のない）話をする	0.26	0.54	38
3. 視線は紙芝居の方を向いているが，内容は追っていない	0.68	1.26	38
4. ボーとしている/あくびをしている	0.11	0.25	38
5. まったく違う方を向いている	3.20	2.37	38

結果と考察

1）紙芝居の総合的な視聴態度（ポジティブ態度・ネガティブ態度）

幼稚園児の紙芝居の視聴態度を，ポジティブな視聴態度とネガティブな視聴態度に分けて分析した．

ポジティブな視聴態度の平均出現頻度（(　　)内の数値）は，「視線が紙芝居に向いている/紙芝居に集中している」（15.21），「集中しているが，身体が動いている」（6.41）が平均頻度“1”以上であり，その他の反応カテゴリーの数値は極めて低い数値であった．

ネガティブな視聴態度の平均頻度では，「まったく違う方向を向いている」（3.20），「手足をモジモジさせて，落ち着きがない」（1.90）であり，その他のカテゴリーは低い値であった（表1　参照）．

ポジティブな視聴態度（1項目～10項目）とネガティブな視聴態度（1項目～5項目）を比較すると，ポジティブ視聴態度の平均頻度（66.00）＞ネガティブ視聴態度（18.26）の関係が有意であった（$t(37)=16.952$，$p<.001$）．

したがって，園児の紙芝居への総合的な視聴態度は，ポジティブな視聴態度が極めて支配的であったといえる．

園児が“まったく”ないしは“ほとんど”反応を示さない項目は，〈ポジティブ視聴態度〉では，「紙芝居の近くまで寄って行って指をさす」（0.00），「紙芝居の場面を真似する」（0.00），「驚く」（0.02），「笑い声をあげる」（0.06），「他の友だちと紙芝居の話をする」（0.07）であった．〈ネガティブ視聴態度〉では，「ボーとしている/あくびをしている」（0.11）であった．

これらのカテゴリー項目は，今後の研究において分類基準の妥当性の点でから，“絵本や物語の読み聞かせ”，“紙芝居の読み聞かせ”，“お絵かき”等の授業内容と関連付けて再検討する必要がある．

2）視聴座席形態（垂直・対面・自由座席形態）が視聴態度に及ぼす効果

紙芝居の視聴座席形態を，垂直視聴座席形態（垂直）と対面視聴座席形態（対面）と自由視聴座席形態（自由）の3つに分け，視聴座席形態と視聴態度（ポジティブ視聴態度・ネガティブ視聴態度）との関係を検討した．

〈ポジティブ視聴態度〉の平均頻度は，垂直（22.34），対面（21.32），自由（22.34）であり，

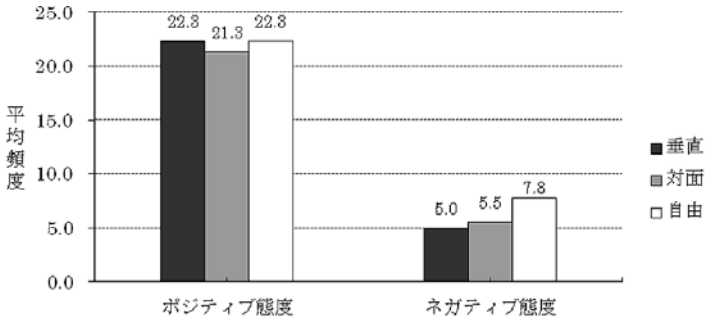

図2　ポジティブ・ネガティブな視聴態度と視聴座席形態

それぞれの視聴座席形態間に有意な平均頻度の差は示されなかった.（図2　参照）

したがって，視聴座席形態は，ポジティブな視聴態度にはほとんど影響していないとする結果であった.

〈ネガティブな視聴態度〉の平均頻度は，垂直（4.94）・対面（5.53）＜自由（7.76）の関係が有意であった（t（37）＝2.623　p＜.05）.

したがって，自由視聴座席形態では他の座席形態に比べ，ネガティブな態度を比較的取り易い視聴環境であるといえよう.

3）視聴座席形態と年齢要因（年少児・年長児）が視聴態度に及ぼす効果

3つの視聴座席形態と年齢要因（年少児・年長児）が視聴態度に及ぼす効果について検討した.

〈ポジティブな視聴態度〉　3つの視聴座席形態別に年少児と年長児のポジティブ態度の平均頻度を表2と図3に示した.

3つの視聴座席形態要因を込みにした場合，年少児（61.07）＜年長児（68.88）（t（36）＝2.48　p＜.05）の傾向が有意にみられた．したがって，年長児の方がポジティブな態度は多く，集中力の発達の度合いを考慮すると妥当な結果ともいえる.

視聴座席形態を含めて分析すると，年少児のポジティブ態度の平均頻度は，垂直（20.50），対面（19.64），自由（20.93）であり，年長児のポジティブ態度では，垂直（23.42），対面（22.29），自由（23.17）であった．視聴座席形態別に比較すると，垂直視聴座席形態にのみ，年少児（20.50）＜年長児（23.42）（t（36）＝2.768　p＜.01）の関係が有意に示された.

したがって，垂直視聴座席形態は，年長児のポジティブな態度形成にとって有効な視聴座席形態であるといえよう.

〈ネガティブな視聴態度〉　3つの視聴座席形態別に，年少児と年長児のネガティブ態度の平均頻度を表3と図4に示した.

3つの視聴座席形態要因を込みにした場合，年少児（20.64），年長児（16.88）であったが，有意差は認められなかった.

視聴座席形態を含めて分析すると，年少児のネガティブな視聴座席形態は，垂直（4.21），対面（6.36），自由（10.04）であり，年長児では，垂直（5.42），対面（5.04），自由（10.07）であった．垂直及び対面視聴座席形態では，年少児と年長児の平均頻度に有意差は示されなかったが，自由視聴座席形態では年少児（10.07）＞年長児（6.42）の傾向が有意に近い形で示された（t（36）＝1.841　.05＜p＜.10）.

したがって，自由視聴座席形態は，年少児のネガティブな視聴態度を引き起こし易い視聴座席形態であることを示唆している.

4）視聴時間（前半・後半）と視聴座席形態が視聴態度に及ぼす効果

視聴時間を前半2分間と後半2分間に分けて，視聴時間と視聴座席形態が園児の視聴態度に及ぼす効果について検討した.

視聴時間を前・後半に分け，3つの視聴座席形態を込みにした分析では，ポジティブ態度の平均

表２　ポジティブな視聴態度の視聴座席形態と年齢の比較

	年　少			年　長		
	人　数	平均値	標準偏差	人　数	平均値	標準偏差
垂　直	14	20.50	2.96	24	23.42	3.23
対　面	14	19.64	3.41	24	22.29	4.36
自　由	14	20.93	3.58	24	23.17	4.37

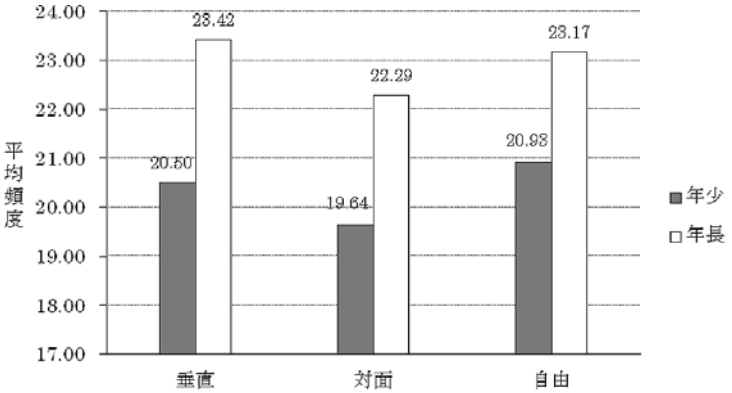

図３　ポジティブな視聴態度の視聴座席形態と年齢の比較

表３　ネガティブな視聴態度の視聴座席形態と年齢の比較

	年　少			年　長		
	人　数	平均値	標準偏差	人　数	平均値	標準偏差
垂　直	14	4.21	5.25	24	5.42	4.80
対　面	14	6.36	6.06	24	5.04	6.59
自　由	14	10.07	5.81	24	6.42	5.96

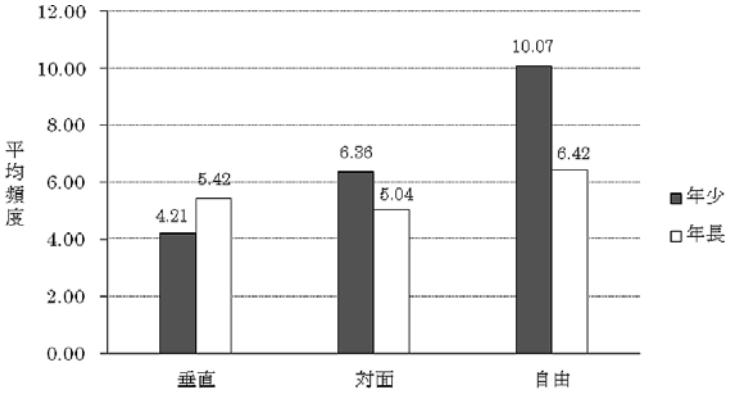

図４　ネガティブな視聴態度の視聴座席形態と年齢の比較

表４　視聴態度に及ぼす視聴時間（前・後半）と視聴座席形態の効果

	垂　直				対　面				自　由			
	前　半		後　半		前　半		後　半		前　半		後　半	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
ポジティブ態度	11.42	2.24	10.92	2.06	11.11	2.51	10.21	2.35	11.26	2.38	11.08	2.52
ネガティブ態度	1.66	1.96	3.32	3.59	3.32	4.48	2.21	2.71	4.29	3.31	3.47	3.65

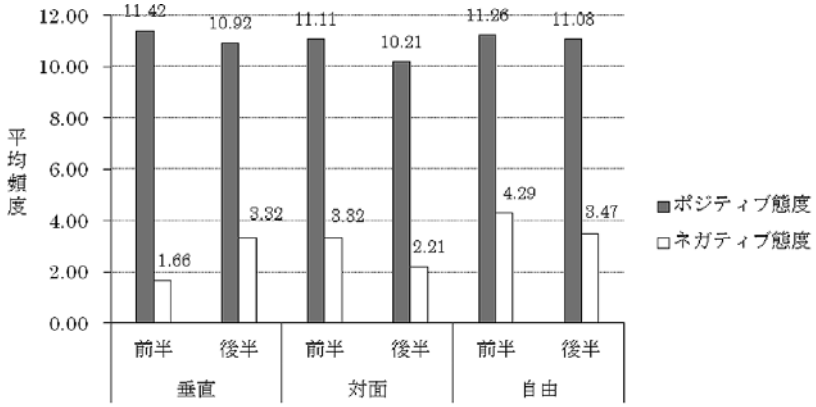

図５　視聴態度に及ぼす視聴時間と視聴座席形態の効果

頻度は，前半（33.79）＞後半（32.21）の傾向が有意に示された(t(37)＝2.545　p＜.05)．しかし，ネガティブ態度の平均頻度は，前半（9.26）・後半（9.00）で有意差はみられなかった．

したがって，視聴時間については，ポジティブな態度は時間の経過とともに減少するが，ネガティブな態度は必ずしもそうならないことを示唆している．

〈ポジティブ・ネガティブな態度と視聴時間・視聴覚座席形態〉

視聴覚時間（前半・後半）内に現れるポジティブ態度とネガティブ態度の平均頻度を，3つの視聴座席形態（垂直・対面・自由）別に検討し，その結果を表4と図5に示した．

垂直視聴座席形態の平均頻度は，ポジティブ態度では，前半（11.42）・後半（10.92）で有意差はなく，ネガティブ態度は，前半（1.66)＜後半（3.32）の傾向が有意であった（t（37)＝3.389　p＜.01)．

対面視聴座席形態の平均頻度は，ポジティブ態度では，前半（11.11)＞後半（10.21）の傾向が有意であり（t（37)＝2.234　p＜.05)，ネガティブ態度は，前半（3.32)＞後半（2.21）の傾向が有意に近い値であった（t（37)＝1.781　.05＜p＜.10)．

自由視聴座席形態の平均頻度は，ポジティブ態度では，前半（11.26)・後半（11.08）で有意差はなく，ネガティブ態度でも，前半（4.29)・後半（3.47）で有意差はなかった．

このように，ポジティブな態度は，視聴座席形態に関係なく視聴時間前半の方が高い傾向がみられた．しかし，ネガティブな態度では，垂直視聴座席形態で後半の頻度が高くなっていたが，対面視聴座席形態・自由視聴座席形態では，逆に後半になるにつれてネガティブな視聴形態が減少するという興味深い結果が得られた．

結　論

1）紙芝居の総合的な視聴態度

幼稚園児の紙芝居の総合的な視聴態度は，ポジティブな視聴態度が極めて支配的であった．例え

ば,「視線が紙芝居に向いている/紙芝居に集中している」「集中しているが，身体が動いている」のカテゴリー項目に反応が集中していた．これらの結果は，園児が紙芝居の内容や話し手の態度に意識を集中させており，極めて望ましい視聴姿勢を示している．また，本研究の実験として成功であったことを示唆するものである．ネガティブな態度として「まったく違う方向を向いている」があがっていた.

しかし，“ほとんど”反応を示していない項目は,「紙芝居の近くまで寄ってきて指をさす」「紙芝居の場面の真似をする」「驚く」「笑い声をあげる」「他の友だちと紙芝居の話をする」「ボーとしている/あくびをしている」である．これらは，分類基準の妥当性の点で今後の課題としたい.

2）視聴座席形態が視聴態度に及ぼす効果

3つの視聴座席形態（垂直・対面・自由）は，いずれも高いポジティブな視聴態度を示しており，視聴座席形態間に得点差がなかったが，自由視聴座席形態でネガティブ視聴態度がより多く示された.

自由視聴座席形態では，園児が自由に視聴することが可能であり，紙芝居に集中できる反面，ネガティブな態度も取り易い形態であると推測できる．この点については更なる検討が必要である.

3）視聴座席形態と年齢要因が視聴態度に及ぼす効果

視聴座席形態と年齢要因（年少児・年長児）とがポジティブ・ネガティブな視聴態度にどのような影響を及ぼすかについて検討した.

ポジティブな視聴態度では，年長児の方がより高い得点を示しており，一般的な課題解決課題での集中力の発達的な成長を考慮すると妥当な結果であるといえる．しかし，視聴座席形態を加味して更に詳しく検討すると，垂直視聴座席形態でのみ年長児の方が高い得点を示していた.

ネガティブな視聴態度では，年齢差は認められなかったが，自由座席視聴形態で年少児の方がネガティブに高い得点を示していた.

これらの結果は，視聴座席形態は年齢要因にある程度支配され，年少児では自由視聴座席形態の際，教師からの望ましい“働きかけ”の必要であることを示唆している.

4）視聴時間と視聴座席形態が視聴態度に及ぼす効果

視聴時間は，3つの視聴座席形態を込みにした分析では，ポジティブな態度で視聴時間前半の方が高い得点を示しが，ネガティブな態度には前後の得点は認められなかった. したがって, ポジティブな態度は時間の経過につれて減少するが，ネガティブな態度は必ずしもそうなっていない．これの結果は，紙芝居への“慣れ”が反映しているとも考えられる.

ポジティブな態度では，いずれの視聴座席形態でも前半の方が高い得点傾向を示していた．しかし，ネガティブな態度では，垂直視聴座席形態では後半が高く，対面・自由視聴座席形態では，逆に後半が低くなるという興味深い結果であった.

本研究では2要因及び3要因の分散分析に適した実験計画となっていない．したがって，要因間の相互作用の検討をすることができなかった．今後の課題としたい.

【引用文献】

浅沼とおる（作・画）（2001）イシギンチャクとウソギンチャク（静止画資料）教育画劇

出口拓彦（2007）大学生の授業における私語と視点取得・友人の数・座席位置の関連：「私語をすること・私語をされること」の相違に着目して　藤女子大学紀要　第44号，第Ⅱ部　45−51

井上よう子（作）・岡村好文（画）（2001）ウミウシめいたんてい（静止画資料）教育画劇

小林　真（1997）集団場面における絵本の読み聞かせと幼児の反応：年齢・性差と座席の位置における影響について　児童文化研究所所報　19，1−13

Millard, R. J. & Stimpson, D. V. (1980) Enjoyment and productivity as a function of classroom seating location Perceptual and Motor Skills, 50, 439−444

宮本えつよし（作・画）（2001）さびしんぼうのヒトデくん（静止画資料）東京画劇

下鶴幸宏・中野正博（2008）座席による学生の勉強意欲の違いの調査研究　バイオメディカル・ファジイ・システム学会誌　Vol. 10，No. 2，149−158

本研究の実験にあたり，献身的なご協力を頂いた埼玉県越谷市の私立S幼稚園の園長・副園長先生をはじめ諸先生方や園児の皆さまに，記して感謝の意を表します.

（本研究は，第1執筆者（森光　彩）が2010年1月に卒業論文として提出したものを，第2執筆者（藤原正光）が加筆・修正したものである.）